

大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所
理論・構造研究系 領域指定型プロジェクト

言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約

Linguistic Variations within the Confines of Language Faculty

日本語獲得に基づく実証的研究

Studies in the Acquisition of Japanese and Parametric Syntax

成果報告書 II

プロジェクトリーダー:	村杉 恵子	(Keiko Murasugi)	
プロジェクトメンバー:	窪菌 晴夫	(Haruo Kubozono)	(2010-2013)
	斎藤 衛	(Mamoru Saito)	(2010-2013)
	杉崎 鉦司	(Koji Sugisaki)	(2010-2013)
	岸本 秀樹	(Hideki Kishimoto)	(2010-2013)
	高橋 大厚	(Daiko Takahashi)	(2010-2013)
	高野 祐二	(Yuji Takano)	(2013)
	瀧田 健介	(Kensuke Takita)	(2013)
	多田 浩章	(Hiroaki Tada)	(2013)
	藤井 友比呂	(Tomohiro Fujii)	(2013)
	宮本 陽一	(Yoichi Miyamoto)	(2013)

2013年9月

日本語における *wh* 島制約の獲得： 予備的研究*

杉崎 鉦司・村杉 恵子

1. はじめに

生成文法理論においては、母語知識の獲得は、(i) 獲得可能な言語の類を規定した生得的な仕組みである「普遍文法」(UG)と、(ii) 生後外界から取り込まれる言語経験の両者の相互作用により達成されると仮定されている。そして、生成文法理論に基づく母語獲得研究は、その主な成果の一つとして、UG に含まれると仮定される様々な属性に関し、それらが母語獲得の観察しうる最初期から幼児の言語知識に反映されていることを様々な手法を用いて示すことにより、UG の存在に対する極めて重要な証拠を与え続けてきた。これらの一連の研究の中で、主要な証拠の一つを成している研究に、*wh* 疑問文(に含まれる依存関係)に対する制約の獲得がある。例えば、de Villiers, Roeper, & Vainikka (1990)は、英語を母語とする幼児が(1)のような *wh* 疑問文を与えられた際、*wh* 句である *how* を、埋め込み節内の *paint* と結びつけて解釈することはせず、主節の *ask* と結びつけて解釈することを実験により示した。その観察に基づき、彼らは、(2a)に示したような間接疑問文からの移動を禁ずる「*wh* 島制約」(*wh*-island constraint) が、英語を母語とする 3-6 歳児の言語知識の中に存在すると主張した。

- (1) How did the girl ask [who to paint]?
- (2) a. * How₁ did the girl ask [who to paint t₁]?
b. How₁ did the girl ask [who to paint] t₁ ?

本研究では、このような研究の流れを踏まえ、日本語獲得においても同様に、*wh* 疑問文に対する制約が観察しうる最初期から幼児の言語知識に反映されているか否かを実証的に調査する。Otsu (2007)による先行研究を概観し、その問題点を指摘した後、我々自身の予備的な実験調査で得られた結果を報告する。

2. 日本語における *wh* 島制約の獲得:先行研究

上記の(2a)および以下の(3b)に示される通り、英語において、*wh* 句が埋め込み節内から文頭へと移動する際、その埋め込み節が疑問文である場合には非文となることが Chomsky (1973)などで観察されており、この効果を生み出す制約は「*wh* 島制約」(*wh*-island constraint)と呼ばれている。

* 本論文で報告されている実験調査の実施を許可して下さった津愛児園の先生方および保護者の方々、実験調査に参加して下さった園児の皆さん、そして実験補助を務めて下さった石橋果奈子さん・加藤実耶さん(三重大学人文学部)に、この場を借りて感謝申し上げます。

- (3) a. What_i did John say [that May liked t_i]?
 b. * What_i did John wonder [whether Mary liked t_i]?

Watanabe (1992)は、英語における *wh* 島制約と同様の効果が、(少なくとも顕在的には)義務的な *wh* 移動を持たない日本語においても見られると主張した。

- (4) a. ジョンは[メアリーが何を買ったと]思っているの？
 b. * ジョンは[メアリーが何を買ったかどうか]知りたがっているの？

日本語における(4b)の非文法性が、英語における(3b)の非文法性を生み出す制約と全く同一の制約から導かれるものであるのかどうかという点や、(4b)にかかわる制約が統語的な制約であるのか、あるいは意味的・音韻的な制約であるのかという点に関しては、非常に多くの理論的研究がすでになされており、様々なアプローチが提案されている(例えば、Richards 2008 による要約を参照)。しかし、(4b)の非文法性を直接的に示唆してくれるような言語経験が全ての幼児に必ず手に入るとは考えにくいことを考慮すると、(4b)を非文とする制約は、UGの属性を反映したものである可能性が高い。もしそうであるならば、日本語を母語とする幼児の持つ言語知識は、観察しうる最初期から、この制約に従う体系になっていることが予測される。

Otsu (2007)は、この予測の妥当性を調べるため、日本語を母語とする3歳児20名・4歳児20名を対象とした実験調査を行った。実験の一つでは、まず、ジョンという人形を導入し、幼児には「ジョンが日本語を勉強中で、どれくらい日本語がわかるようになったか調べたいので、手伝ってほしい」という旨の説明を行った。その説明の後に、実験者が、幼児とジョンにお話を聞かせ、お話の後に、実験者がジョンに質問を行い、ジョンが質問に答えた。幼児が行うべき作業は、ジョンの答えそれぞれについて、「適切」なものであったかどうかを判断することであった。(なお、用いられている方法は、Crain & Thornton (1998)などで議論されている真偽値判断法(truth-value judgment task)に近いが、実際に幼児が判断を求められているのはジョンの答えの内容の「真偽」(truth)ではなく、ジョンの答えの形式の「適切さ」(appropriateness)であるため、若干方法が異なる。この点は、次節で述べる我々の実験にも当てはまる。)

実際に用いられたお話の一つは、(5)にある通りである。このようなお話の後に、(6)のような質問と、それに対するジョンの答えが幼児に提示された。

- (5) お話:
 太郎君と花子さんがなかよくテレビでドラえもんを見ていました。そこへ、おかあさんがおかしを持ってきてくれました。そして、太郎君に「太郎はだれが好きなの?」と聞きました。太郎君は「もちろん、ドラえもんさ」と答えました。おかあさんは花子さんにも「花子はだれが好きなの?」と聞きました。花子さんはほんとうはのび太君が好きなのですが、ちょっとはずかしかったので、「ひみつ」と答えました。

- (6) a. お母さんは花子さんに[誰が好きか]聞きましたか？ ジョン:はい。
 b. 花子さんは[誰が好きか]言いましたか？ ジョン:*はい。
 c. お母さんは太郎君にも[誰が好きか]聞きましたか？ ジョン:はい。
 d. 太郎君は[誰が好きと]言いましたか。 ジョン:*はい。

(5)のようなお話および(6)のような質問を 2 種類提示し、それにより得られた結果は、(7)の表のとおりであった。

(7) Otsu (2007)の実験結果

質問の種類	人形の答え	正答数及び正答率
お母さんは花子さんに[誰が好きか]聞きましたか？	はい	80 / 80 (100%)
花子さんは[誰が好きか]言いましたか？	*はい	80 / 80 (100%)
お母さんは太郎君にも[誰が好きか]聞きましたか？	はい	80 / 80 (100%)
太郎君は[誰が好きと]言いましたか。	*はい	74 / 80 (92%)

Otsu (2007)は、得られた結果から、日本語を母語とする幼児は埋め込み文が「と」で導かれているか「か」で導かれているかによって *yes/no* 疑問文であるか *wh* 疑問文であるかを区別することができ、したがって *wh* 島制約の効果に関する知識を持つと結論付けている。

Otsu (2007)の実験は、日本語における *wh* 島制約の獲得を調査することで、日本語獲得における UG の関与を実証的に示そうとした点で、大変価値のあるものである。しかし、導かれた結論に照らすと、その実験方法には重大な問題が潜んでいると言わざるを得ない。(4b)に示した通り(以下に(8b)として再掲)、日本語における *wh* 島制約は、「かどうか」のような疑問文を示す標識で導かれた節の中にある *wh* 句が、「かどうか」を超えて主節を作用域とすることができない、という効果を生み出すものである。同様に、(9b)に示すように埋め込み文が「か」で導かれている場合には、*wh* 句は埋め込み節内の「か」と結びつき、それを超えて主節を作用域とすることはできないため、(9b)は *wh* 疑問文ではなく、*yes/no* 疑問文として解釈される。(談話の状況によっては、(9b)に対し、「言ったよ。リンゴだよ。」のような形で、*wh* 句に相当する情報を、「はい/いいえ」の答えに追加して供給することは可能であるが、その本質的な解釈は *yes/no* 疑問文に限定される。)

- (8) a. ジョンは[メアリーが何を買ったと]思っているの？
 b. * ジョンは[メアリーが何を買ったかどうか]知りたがっているの？
 (9) a. ジョンは[メアリーが何を買ったと]お母さんに言ったの？
 b. ジョンは[メアリーが何を買ったか]お母さんに言ったの？

したがって、幼児の言語知識の中に *wh* 島制約を反映した知識が存在することを示すためには、幼児が(9b)に対して、(その本質的な解釈として) *wh* 疑問文としての解釈を許容しない、という点を示さねばならない。一方で、Otsu (2007)の研究が端的に示した点は、幼児が(9a)のような「と」で導かれた埋め込み節を伴った *wh* 疑問文に対して、*yes/no* 疑問文としての解釈を許容しないという点のみであ

り、したがって幼児が *wh* 島制約の知識を持つか否かという点に関しては、答えを与えていないことになる。

次節で報告する予備的実験は、Otsu (2007)の実験研究の問題点を踏まえ、それを改善することにより、日本語を母語とする幼児が *wh* 島制約に関する知識を持つという点に対する明示的な証拠を与えることを目的としたものである。

3. 日本語における *wh* 島制約の獲得: 新たな実験

我々の新たな実験においては、日本語を母語とする幼児 28 名 (3 歳児 4 名、4 歳児 17 名、5 歳児 7 名; 年齢範囲は 3 歳 9 か月から 5 歳 5 か月で、平均年齢は 4 歳 7 か月) に対して予備的調査を実施した。実験方法は、幼児に質問を行う方法 (Question after Story) と、幼児に答えの適切さを問う判断法 (Appropriateness Judgment Task) を組み合わせる方法を用いた。まず、Otsu (2007) の実験と同様に、人形 (我々の実験では、恐竜の人形) を幼児に紹介し、「恐竜さんはまだ日本語が上手ではないので、質問に対する答えを間違えたら教えてあげてほしい」旨を伝えた。実験では、写真を見せながら、以下のようなお話を幼児に与えた。

(10) お話:

今日は、おさるさんがゾウさんのおうちに遊びに来ています。テーブルの上に、おやつホットケーキと果物があつたけど、2 人は一緒に果物を食べることにしました。ゾウさんはおさるさんに「何が一番好きなの?」と聞きました。おさるさんは「イチゴ!」と答えました。そこへ、ゾウさんのお父さんがお仕事から帰ってきました。お父さんは、ゾウさんに「何が一番好きなの?」と聞きました。ゾウさんは、ちょっと恥ずかしかったので、ないしょにしようかなと思いました。でも、おみやげに電車のおもちゃをもらったので、「ぶどう!」と教えてあげました。



①



②



③



④



⑤

(10)のようなお話の後に、(11)のような質問を、幼児と恐竜の人形の両方に対して行った。手順としては、各質問について、まず幼児に答えを求めた。そして、各質問ごとに、幼児が答えた後に、恐竜に対しても同じ質問を行い、その質問に恐竜が答えた。幼児には、自らに対する質問に答えることに加えて、その恐竜の答えが適切であったかどうかについて、恐竜が手にしている○・×の紙を指し示すことにより判断することが求められた。典型的な会話は、(12)のように行われた。

(11) 質問の例：

- a. おさるさんとゾウさんは、ホットケーキを食べたかな？
(恐竜：うん、食べたよ。)
- b. おさるさんは、何が一番好きとゾウさんに言ったかな？
(恐竜：イチゴだよ。)
- c. ゾウさんは、何が一番好きかお父さんに言ったかな？
(恐竜：ぶどうだよ。)

(12) 典型的な会話：

- 実験者： (お話をした後に)今のお話わかったかな？じゃあまずたくちゃん(幼児の名前)に聞くよ。おさるさんとゾウさんは、ホットケーキを食べたかな？
- 幼児： 食べてない。
- 実験者： じゃあ、恐竜くんにも聞いてみるね。恐竜くん、おさるさんとゾウさんは、ホットケーキを食べたかな？
- 恐竜： うん、食べたよ。
- 実験者： 恐竜くんの答え、合ってたかな、変だったかな？
- 幼児： (×を指さす。)
- 実験者： よくできたね。じゃあまた、たくちゃんに聞くよ。おさるさんは、何が一番好きとゾウさんに言ったかな？
- 幼児： イチゴ。
- 実験者： じゃあまた、恐竜くんにも聞いてみるね。恐竜くん、おさるさんは何が一番好きとゾウさんに言ったかな？
- 恐竜： イチゴだよ。
- 実験者： 恐竜くんの答え、合ってたかな、変だったかな？
- 幼児： (○を指さす。)
- 実験者： よくできたね。じゃあまた、たくちゃんに聞くよ。ゾウさんは、何が一番好きかお父さんに言ったかな？
- 幼児： うん、言ったよ。
- 実験者： じゃあまた、恐竜くんにも聞いてみるね。恐竜くん、ゾウさんは何が一番好きかお父さんに言ったかな？
- 恐竜： ぶどうだよ。
- 実験者： 恐竜くんの答え、合ってたかな、変だったかな？
- 幼児： (×を指さす。)

このように、幼児に質問を行う方法(Question after Story)と、幼児に答えの適切さを問う判断法(Appropriateness Judgment Task)の2種類を組み合わせた理由は、以下の通りである。前節でも述べたように、(11c)のような疑問文は、談話の状況によっては、「うん、言ったよ。ぶどうだよ。」のように、*wh* 句に相当する情報を、「はい/いいえ」の答えに追加して供給することが可能である。したがって、幼児に適切性の判断だけを求めてしまうと、(11c)に対する恐竜の答えが「適切」であるという反応が幼児から返ってきた際、それが(i)与えられた疑問文を *wh* 疑問文と解釈したためなのか、それとも(ii)「うん、言ったよ。ぶどうだよ。」のような答えの可能性に照らして「適切」と判断したのかの区別をつけることが難しい。そのため、各質問をまず幼児に尋ね、その答えを確認することで、幼児が与えられた疑問文を *wh* 疑問文と解釈したのか *yes/no* 疑問文と解釈したのかを確認した上で、人形の答えの「適切さ」を判断させることとした。

実験は、(10)のようなお話し2つと、フィラーとしてのお話し2つの計4つから構成された。お話の提示順・刺激文の提示順はそれぞれ2種類用意された。得られた結果は以下の通りである。

(13) 実験結果:

	(11a)のような 練習問題		(11b)のような 「～と～か」文		(11c)のような 「～か～か」文	
	幼児の答え	適切性判断	幼児の答え	適切性判断	幼児の答え	適切性判断
正答数	55/56	55/56	54/56	54/56	47/56	46/56
正答率	98.2	98.2	96.4	96.4	83.9	82.1

上記の結果が示す通り、幼児は、(11c)のような埋め込み文が「か」で導かれている文に対し、83.9%という高い割合で、*yes/no* 疑問文として解釈して答えを与え、同様に 82.1%という高い割合で *wh* 疑問文として解釈した人形の答えに対し「不適切」という判断を下す、ということが分かった。4名の幼児から、このような「～か～か」文に対して、一貫して、*wh* 疑問文として解釈したかのような反応(「ぶどう。」)が返ってくるとともに、そのような人形の答えに対しても「適切」であるとの反応が得られた。また、1名の幼児からは、「～と～か」文に対して、一貫して *yes/no* 疑問文として解釈したかのような反応(「うん、言ったよ。」)が返ってくるとともに、人形の「イチゴだよ。」の答えに対しても「不適切」であるとの反応が得られた。この点については次節で簡単に議論するが、幼児から得られた大部分の反応が *wh* 島制約に従った反応であるという発見が弱められるわけではないと考えられる。

4. 「誤答」に対する分析

以上、本論文では、普遍文法を反映した属性と考えられる *wh* 島制約の知識が、観察しうる最初期から幼児の言語知識に含まれているか否かについて、予備的な実験調査を実施した。本研究では、Otsu (2007)による先行研究が、日本語を母語とする幼児に *wh* 島制約の知識があるかどうかという点に直接答える実験デザインにはなっていない点に着目し、その点を改善した調査を実施した。本研究は、獲得研究において、調べようとしている理論的性質の本質を正しく認識することの必要性を

示唆したものと解釈することができる。

本実験の調査方法は、本質的には「Question after Story」で、全ての質問に関して、まず幼児に対して質問を行い、幼児は質問に回答する。そして、幼児が答えた後に、さらに恐竜の人形に対しても同じ質問を行い、幼児はその人形の答えに判断を与える。したがって、通常の実験の真偽値判断法 (truth-value judgment task) とは異なり、連続して判断のみを行うわけではなく、判断を行う前に、必ず与えられた質問 (yes/no 疑問文あるいは *wh* 疑問文) に自らが答えることが求められるという特徴がある。

今回の調査の結果、調査に参加した幼児達のうち、ほぼ大多数の反応において、本実験の主要な文となる「ゾウさんは何が好きかお父さんに言ったかな？」という質問に対し、幼児は、(大人と同様に正しく)「うん、言ったよ」と答え、人形の「ぶどう」という答えについては(大人と同様に正しく)「不適切」と判断している。先に述べたように今回の実験においては、まず幼児から答えを引きだし、次に人形の答えについて、それが適切な答えであるかどうかについても判断させていることから、この実験結果は、幼児の知識を二重に確かめつつ引き出しており、極めて正確なものであるといえよう。本実験で得られた結果は、Otsu (2007)による先行研究よりははるかに説得力を持って、幼児に *wh* 島制約の知識があるということを示すことができたと考えられる。

さらに、本研究の結果では、少数の幼児からではあるが、興味深い「誤答」が、一定の一貫性を持って、複数の幼児から得られている。それは、上記の本実験の主要な文である「ゾウさんは何が好きかお父さんに言ったかな？」に対し、「誤って」「ぶどう」と子どもが答え、人形の答えにも「ぶどう」に対しても「誤って」適切であると判断しているのである。まずは、幼児の発話として、次に人形の答えの真偽の判断として、二重に示していることから、それは「理由のある誤答」であると考えることができる。そして、その結果は、単純に判断すると、幼児がこの文を *wh* 疑問文として解釈しており、しかも、*wh* 島制約に違反しているとも考えることもできよう。

しかし、先に述べたように、大多数の幼児が、他の場合については大人と同様の判断をしており、かつ、あるひとつの実験文ならびに文脈提示のときのみに一貫して観察される。このことから、これがいわゆる文法知識そのものに関わる問題ではなく、この「誤答」が、真偽値判断法の実験手法にある潜在的問題に関わる可能性があることを指摘したい。

問題となった実験文とその文脈提示を含むセットを再度みてみよう。

(13) 典型的な会話：「誤答」の場合

- 実験者： (お話をした後に) 今のお話わかったかな？ じゃあまずたくちゃん(幼児の名前)に聞くよ。おさるさんとゾウさんは、ホットケーキを食べたかな？
- 幼児： 食べてない。
- 実験者： じゃあ、恐竜くんにも聞いてみるね。恐竜くん、おさるさんとゾウさんは、ホットケーキを食べたかな？
- 恐竜： うん、食べたよ。
- 実験者： 恐竜くんの答え、合ってたかな、変だったかな？
- 幼児： (×を指さす。)

- 実験者: よくできたね。じゃあまた、たくちゃんに聞くよ。おさるさんは、何が一番好きとゾウさんに言ったかな？
- 幼児: イチゴ。
- 実験者: じゃあまた、恐竜くんにも聞いてみるね。恐竜くん、おさるさんは何が一番好きとゾウさんに言ったかな？
- 恐竜: イチゴだよ。
- 実験者: 恐竜くんの答え、合ってたかな、変だったかな？
- 幼児: (○を指さす。)
- 実験者: よくできたね。じゃあまた、たくちゃんに聞くよ。ゾウさんは、何が一番好きかお父さんに言ったかな？
- 幼児: ぶどう。
- 実験者: じゃあまた、恐竜くんにも聞いてみるね。恐竜くん、ゾウさんは何が一番好きかお父さんに言ったかな？
- 恐竜: ぶどうだよ。
- 実験者: 恐竜くんの答え、合ってたかな、変だったかな？
- 幼児: (○を指さす。)

実は、この三つの質問からなる最初の二つは、提示されたお話の内容について、人形が正しく理解しているかを試すものである。このとき、幼児に判断が求められているのは、内容に関する「真偽」の判断である。ところが、最後の一つで試されているのは、提示された質問に対しての人形の答えが、「答えの形式」として適切なものかどうかである。すなわち二つのタイプの質問、「提示された内容がと怪獣さんの答えが内容的に一致しているか」と「人形が *yes/no* 疑問文を *wh* 疑問文としてではなく、『はい/いいえ』のいずれかで答えることができるか」が、この順番で幼児に与えられる。

更に、このとき、人形の答えとして『誤って』示される「ぶどう」は、まさに文脈の中で与えられた状況と合致している。このお話の中で食べられたものは、「ぶどう」であり、それは談話上、正しい内容である。「ゾウさんは何が好きかお父さんに言ったかな？」のような文において「ぶどう」のような答えは、上記でも述べた通り、成人の談話においては、*yes* の答えに後続して出てくるのが可能であるという点において、全く不可能とは言えない。

そして、複数の幼児が、この状況の下でのみ、三つ目の質問において、前の二つの答えと同様にお話の内容に関して答え、そして、その答えは、談話上、間違いとはいえないものを選んでいく。

先に述べたように、これらの結果が、幼児が、文法知識に問題があることを示しているとは考えにくい。*wh* 疑問文と *yes/no* 疑問文を混乱していないことは、フィラー (*filler*) として与えている調査からも明らかである。例えば、「カッパちゃんは何を切ったかな？」という *wh* 疑問文を与え、幼児に答えてもらった後に、人形にも同じ質問を行い、人形は「うん、食べたよ」と答える。この場合には、幼児に判断が求められているのは、「真偽」ではなく、「答えの形式」となっており、それについては大人と同じように「正しく」答えることができるのである。

Nakayama (1996)をはじめ、真偽値判断法は、幼児が、提示された内容の真偽を判断しているのか、提示された文の形式とそこで聞かれた文の答えが合致しているのかを判断しているのか、それら

を分けて調査することが困難であることが指摘されている。今回の実験で一貫して見られた「誤答」も、文法上の要因によるものでなく、幼児が、実験上、二種類の答えについて判断することが求められている（すなわち最初の二つは、内容について正しい名詞句を選択し、最後の一つは、『正答』として「はい」あるいは「いいえ」と答えればよい）ことを意識しない限り、それまでの答え方と同じ（この場合は与えられたお話の内容についての）タイプの形式で答え、幼児は与えられた文脈と談話に基づいて「正しい」内容を選ぶと考えることができる。

このことは、今回の実験者の観察と矛盾しない。幼児の中には、「～かお父さんに言ったかな？」というタイプの問いに対し、「言ったよ。アンパンマン。」という答えを返す場合があることも観察されている。

異なるタイプの問題について、前の答え方と同じ答え方をし続けるのは、動作法 (Act-Out Task) での“Bird in Hand Phenomenon”にも通ずる。幼児の傾向として、手にもったおもちゃを持ち続ける実験上の特徴のひとつは、真偽値判断法においても、いったん答える方法を決めたらそれを続け、同じ答え方を続けても、談話上、十分に、その答え方でもよいという範囲にあるのであれば、幼児は、判断に用いるスペースを談話まで広げ、結果的に、大人の文法としては『誤った』答えを選ぶ。

「いいえ」(No)と判断するのに十分な材料が実験の場になれば、幼児は、「はい」(Yes)を選ぶとする Plausible Denial/ Plausible Dissent (Murasugi, 1988; Crain and Thornton 1998)の本質は、ここにもみられるといえよう。文字通り「はい」「いいえ」で答え「ればいい」ところを、前の答え方をひきずって、同じ答え方で談話上可能な広い範囲の中から答えを選ぶ特徴は、Plausible Ascent とでも称されるものかもしれない。¹

5. まとめ

本研究では、日本語を母語とする幼児が、*wh* 島制約の効果に関する知識を持つか否かに関する新たな実験調査を実施した。先行研究である Otsu (2007)の問題点を指摘した上で、それを改善した予備的実験の結果を報告した。本研究で得られた結果は、日本語を母語とする 3-5 歳児の中に、すでに *wh* 島制約の効果に関する知識が存在していることを示唆するものであると考えられる。日本語における *wh* 島制約が、UG の属性から導かれるのであれば、本研究の結果は、母語獲得に対する UG の関与に対して、日本語獲得からの新たな支持を与えるものであろう。

1. 今回の予備的実験では、「～か～か」文に対して、一貫して、*wh* 疑問文として解釈したかのような反応（「ぶどう。」）が返ってくるのと同時に、そのような人形の答えに対しても「適切」であるとの反応が数名から観察され、また「～と～か」文に対して、一貫して *yes/no* 疑問文として解釈したかのような反応（「うん、言ったよ。」）が返ってくるのと同時に、人形の「イチゴだよ。」の答えに対しても「不適切」であるとの反応も 1 名から得られている。これらの反応が、実験上の問題によるものであるのか、それとも幼児の言語知識から生じるのかは残された重要な課題である。これらの課題に取り組むために、またよりデータの精度をあげるために、再度、改訂されたデザインによる本実験を計画・実施予定である。

参考文献

- Chomsky, Noam. 1973. "Conditions on transformations." In *A festschrift for Morris Halle*, eds. Stephen Anderson and Paul Kiparsky, 232-286 New York: Holy, Rinehart and Winston.
- Crain, Stephen, and Rosalind Thornton. 1998. *Investigations in Universal Grammar: A Guide to Experiments on the Acquisition of Syntax and Semantics*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- de Villiers, Jill, Tom Roeper, & Anne Vainikka. 1990. "The acquisition of long-distance rules." In *Language processing and language acquisition*, eds. Lyn Frazier and Jill de Villiers, 257-297. Dordrecht: Kluwer.
- Murasugi, Keiko. 1988. "Structural and Pragmatic Constraints on Children's Understanding of 'Backwards Anaphora.'" *UConn Working Papers in Linguistics* 2: 40-68.
- Nakayama, Mineharu. 1996. *Acquisition of Empty Categories*. Tokyo: Kuroshio.
- Otsu, Yukio. 2007. "Wh-island in child Japanese." Paper presented at Keio Workshop on Language, Mind, and the Brain. Keio University, March 18, 2007.
- Richards, Norvin. 2008. "Wh-questions." In *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, eds. Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito, 348-371. New York: Oxford University Press.
- Watanabe, Akira. 1992. "Subjacency and S-structure movement of wh-in-situ." *Journal of East Asian Linguistics* 1:255-291.

Appendix: 今回の予備実験で用いられたお話とテスト文

(注) 実際に提示された順序は、以下とは異なる。

A. (Filler)

ライオンさんとかっぱちゃんが、お料理の練習をしています。ライオンさんは、お魚を切ろうかなと思いました。でも難しそうなので、ニンジンを切ることになりました。かっぱちゃんは、お料理が苦手なので、ライオンさんがニンジンを切るのを見てるだけにしようかなと思いました。でも、ライオンさんを見ていたらやってみたくなったので、かっぱちゃんは大好きなキュウリを切ってみました。

(質問 1) ライオンさんは、お魚を切ったかな？

(恐竜の答え: いいや、切らなかったよ。)

(質問 2) かっぱちゃんは、何を切ったかな？

(恐竜の答え: うん、切ったよ。)

B. (Filler)

パンダさんとペンギンさんは、お絵かきをして遊ぶことにしました。パンダさんは、バスの絵を描こうかなと思っています。でも、新幹線の方がかっこいいので、新幹線の絵を描くことにしました。ペンギンさんは、絵を描くのが苦手なので、パンダさんが新幹線を描くのを見てるだけ

にしようかなと思いました。でも、パンダさんを見ていたらやってみたくなかったので、ペンギンさんは大好きな飛行機の絵を描いてみました。

(質問 3) パンダさんは、バスの絵を描いたかな？

(恐竜の答え：いいや、描かなかったよ。)

(質問 4) ペンギンさんは、何を描いたかな？

(恐竜の答え：うん、描いたよ。)

C. (Target Trial)

今日は、ウサギさんがカエルさんのおうちに遊びに来ました。ポケモンの絵本とアンパンマンの絵本があったけど、2 人は、一緒にアンパンマンの絵本を読むことにしました。カエルさんはウサギさんに「誰が一番好きなの？」と聞きました。ウサギさんは、「食パンマン！」と答えました。そこへ、カエルさんのお母さんがお買い物から帰ってきました。お母さんは、カエルさんに、「誰が一番好きなの？」と聞きました。カエルさんは、ちょっと恥ずかしかったので、ないしょにしようかなと思いました。でも、お母さんがおやつにリンゴをくれたので、「アンパンマン！」と教えてあげました。

(質問 5) ウサギさんとカエルさんは、アンパンマンの絵本を読んだかな？

(恐竜の答え：うん、読んだよ。)

(質問 6) ウサギさんは、誰が一番好きとカエルさんに言ったかな？

(恐竜の答え：食パンマン。)

(質問 7) カエルさんは、誰が一番好きかお母さんに言ったかな？

(恐竜の答え：アンパンマン。)

D. (Target Trial)

今日は、おさるさんがゾウさんのおうちに遊びに来ています。テーブルの上に、おやつホットケーキと果物があったけど、2 人は一緒に果物を食べることにしました。ゾウさんはおさるさんに「何が一番好きなの？」と聞きました。おさるさんは「いちご！」と答えました。そこへ、ゾウさんのお父さんがお仕事から帰ってきました。お父さんは、ゾウさんに「何が一番好きなの？」と聞きました。ゾウさんは、ちょっと恥ずかしかったので、ないしょにしようかなと思いました。でも、おみやげに電車のおもちゃをもらったので、「ぶどう！」と教えてあげました。

(質問 8) おさるさんとゾウさんは、ホットケーキを食べたかな？

(恐竜の答え：うん、食べたよ。)

(質問 9) おさるさんは、何が一番好きとゾウさんに言ったかな？

(恐竜の答え：いちご。)

(質問 10) ゾウさんは、何が一番好きかお父さんに言ったかな？

(恐竜の答え：ぶどう。)

